

## 孤独の池——システムと心理

森本太郎の今回の個展では、これまで様々な機会ごとに蓄積されてきたイメージソースのなかから、幾つかを選んで加工し直し色彩計画を変更することによって、新たな作品が創り出されている。いわば、以前の計画のなかで微睡（まどろ）み、いまだ具体化されていなかった可能性を過去のイメージに与えた、落穂拾いのような作品の集積、ということになるだろうか。上野の不忍の池に浮かぶ水鳥や、青山のファッションビルとその周囲の風景、故郷岡山の恩師の家で見たドライフラワー、茗荷谷のアトリエ近隣の花壇に咲く花。それらは過去からかすかに響いてくる遠い木魂（こだま）のようであり、現在まで幾重にも堆積した心理や経験の層がそこに襲を作って、観る人にさまざまな連想を浮かばせるようでもある。

こうした森本の作品は、制作方法をみると、とてもシステムティックに出来上がっている。これは彼が本格的な作家活動を始めて以来今日まで、基本的にはほぼ変わっていないシステムに基づいている。

そのプロセスはこうだ。始めに、自分で撮影した写真、ないしは既成の写真や画像をコンピュータに取り込み、画面上でフィルターを通すなど、輪郭や色彩に様々な加工を施してゆく。ある程度納得がいく段階に落ち着くと、今度はその加工された画像を忠実にキャンバス上にアクリル絵具で再現していく作業に入る。これには白黒の輪郭線をなぞったイメージだけをプリントしてみても拡大のサイズを決定してみたり、コンピュータ画面上で決定した色彩を実際の絵具で表すときの色面との対応表を作ってみたりと、たいへん緻密な作業が含まれている。最近私は森本のアトリエを訪問したときに、この色彩の対応表に85種類もの色名が記されているのを見て、とても驚かされた。出来上がるべきその作品は、それほど色彩的に雑多な印象を受けないにも関わらず、である。彼は似たような微妙な色彩の変化にも、非常に細かい神経を使っているのだ。

私はこれまで、こうしたプロセスから生み出される森本の作品を、おもに、アートから創作者の感情の「表現」を追放し、「主観」を排除する態度、という側面からずっと捉えてきた。しかし最近、ここに来て、どうもそれだけではない、と感じ始めるようになった。先に述べたアトリエ訪問で、森本は、最近のコロナやウクライナ情勢のニュースなど見ていると、どうも心が沈んできて、その暗さが作品に反映してしまう、というようなことを語っていた。つまり、その作品は、やはり作家の内面や精神や心情といったものを、如実に反映しているのだ。

これはどうしたことなのか。どうしても「作品」には「作者」の心情が否応なく含まれてしまうものなのか。さきに述べた森本のシステムティックな制作方法のなかに、それでも主観的情緒が忍び込んでくる、というのは、私にはとても興味深く思える。彼の制作過程のなかで、情動的なものが忍び込んでくる余地とは、コンピュータ上で加工を施して色彩を決定するときに、そのときどきの微細な知覚・感覚・精神状態が、微妙な違いの色を選ばせるということであり、実際にキャンバスに絵具を塗る過程でも、そこで選ばれる色や線のありかたに、それらは微妙に影響を与えるにちがいない。ここで改めて気づかされ驚かされるのは、あからさまに表現的な身振りではなく、森本が行っているようなシステムティックでストイックな制作方法のなかに、そのシステムのなかで微妙なパルスの振動が作者の心情を測定してしまうように、否応なく「主観」や「感情」がそこに滲み出てしまう、ということなのだ。そのことの奥深さに私は強く打たれてしまうのである。

人間は今でも繰り返す戦争を行ってしまうものであり、それに悩む人間がまた大勢おり、そのことについてどうしたらいいか分からないまま、その心情を「表現」してしまわずにはいられない人間がいる。私たちはそれに共感し、そこからどこかに一歩進みたい、と願う。そんな私たちの心情の在り様も映す森本の作品は、いよいよ、その「表面」から覗かれる「深み」を増しているのかもしれない。

「孤独の池」という展覧会タイトルは、フランソワーズ・サガンの短編小説のタイトルに基づいている（「L'étang de solitude」、短編集『絹の瞳 Des yeux de soie』、1975、に収録）。仕事も恋愛も順調な30歳の女性が、友人との集まりから帰る途中に、ふと寂しい秋の風景に惹かれて車から降り、誰もいない池の畔で、木の幹に腰掛けて、枯葉が渦巻く水面を見つめる。すると何故か、彼女の中にあつた、忘れていたような、さまざまな暗い想念に直面することになるのだが、それもすぐに振り払い、恋人の許に、日常性のなかに帰っていく。この本は、森本のアトリエを訪問したときに彼の机の上にあつたもので、そのタイトルや内容は、これまで述べてきたような彼の、今回出品される作品との関係を暗示するものなのかもしれない。私はといえば、新潮文庫のサガンのシリーズの表紙を飾っているベルナール・ビュフェの神経質な線描の絵画が、ふと、アトリエの今回出品される森本の作品と呼応しているような気がしていたのだった。

倉林 靖／美術評論家・音楽評論家